

令和2年度 第1回学校運営協議会 報告書

1 令和2年度学校経営計画について

全ての委員の方々より承認いただきました。ありがとうございます。

2 学校経営計画への意見・提言

(1) 進路実現

学校経営計画の骨子には、

①「北千里高校に行けば国公立、関関同立などの……。」

②「視野を広げ、人間的に精神的に豊かな……。」

とありますが、

包含図でいうなら「視野を広げ、人間的に精神的に豊かな……。」があって、「北千里高校に行けば国公立、関関同立などの……。」は、その内側に含まれる。(表記順への提言)

<授業力の向上>

引き続き是非お願いして進めていただきたい。

そのための具体的な手段として以下のようなことにも取り組んでいただきたい。

①相互の参観だけでなく、授業後の研究会やメンター制などを用いた授業者の振り返り

②府教育庁の指導主事や大学等の研究者などを招聘した研究協議会 等

<探究学習>

先生方には各教科授業のプロとしての一面とは別に、生徒の探究学習を支える、学習の促進者（ファシリテーター）としての一面が求められる。それをどのように培っていくのかが課題。

<SDGsを意識しながら教育活動を組み立てる>

SDGsは受け身の他人事ではなく、まさに自分事なのだということです。個人差もあるかと思いますが、どのようにすれば「自分事」として捉えることができるか。学校として仕掛けが必要。 ➡参考資料1

(2) 国際理解

何か遠くに目を向けるのではなく、身近なところ、今あるリソースに様々な角度から光を当ててみれば、価値ある切り口が見えてくるかもしれない。 ➡参考資料2

(3) 地域連携

今後あるかもしれないといわれる第二波、第三波の影響で、人の移動などに障壁があっても、物の移動やオンライン上での情報の移動は可能です。「地域」や「連携」の枠組みというものを柔軟に考える必要がある。

(4) 探究学習

「社会の課題に目を向ける」とは、知識として知ってはいるようなことでも、身近な「自分事」から出発することから始まる。地に足がついたところからのアプローチ、そして自分たちとは異質な場での発表など、アウトプットの仕方も含めた、探究学習を模索してほしい。 ➡参考資料3

(5) 安心・安全な学習環境 生徒の安全を守る

リスクにつながる情報を受ける側は、多様な情報源にあたること、沢山の情報が入ってくる体制を整えることが重要と考えます。組織内のコミュニケーションも大切。様々なチャンネルで情報が入ってきて、比較考量し、だいたいこういうことなのかと分かると、次の対処も可能となる。

(6) 働き方改革

単に上限の範囲内で残業時間を押さえることが目的ではなく、教員の健康や福祉の確保を図ることや、子どもと向き合う時間をしっかりと確保することが肝のはず。

・働き方改革につながる可能性としての例

①授業動画コンテンツの利用 YouTube、NPO、府教育センター

②地域やOBの人材活用

学校がどのような人材を必要としているのか、また何をどれだけ必要としているのかを発信する工夫をするとよい。

参考資料

1. SDGs

「THE 大学インパクトランキング 2020」

(<https://japanuniversityrankings.jp/>) というのがあります。進路とも関連してとらえることができそうです。

2. 国際理解

〈姉妹校提携のある台湾についての事例〉

SDGsとも関わりますが、交流校の台湾は、世界でもトップクラスの環境先進国ということとはあまり知られていません。台湾の資源回収率は2018年には53.28%に達していて、この数字は世界でトップでした。

また、台湾では2019年7月から、ドリンクを購入した店内で飲み物を消費する際にはプラスチック製ストローを提供しないという法律が施行されており、プラ製レジ袋、使い捨てプラ製食器、使い捨てプラ製コップ、使い捨てプラ製ストローなど、使い捨てプラ製品は2030年全面的に使用禁止になります。台湾は、その目標に向けて着実に進んでいます。

3. 探究学習

〈くるくるプラザの発表事例〉

プラザの話で恐縮ですが、今年の2月、プラザで「第21回環境学習発表会」を催しました。例年は吹田市の全ての小学4年生が施設見学に来ることから、4年生のクラスや学年単位の発表が中心でした。回を重ね最近では、係り活動や中学校のクラブ活動、ガールスカウトからの参加も見られます。

そんな中、今回は、地元関西大学の草郷ゼミ生の皆さんからの発表と、小学生の個人発表も加わったのでした。その個人発表の5年男児のプレゼンが、「魚の中のマイクロプラスチック探してみた!」でした。

男児のきっかけは、海岸でプラスチックのごみを見つけたこと、同時期にマイクロプラスチックの記事を新聞で目にしたこと、そして、プラスチックのごみを魚がどれだけ食べているかを知りたくなったことでした。

彼は実際売られている魚にもマイクロプラスチックが入っていると予想し、内臓を開いて見ようとしたのですが、あれこれと苦労して2時間以上かかっても見つけることはできませんでした。

そこであきらめずに、色々と調べ、台所用の漂白剤（アルカリ系）に内臓をつけ込む方法を見つけたといいます。溶けた内臓を入れる容器や手製のこしき、腐臭対策のマスクも準備し、約一週間後、漬け込んだ内臓からマイクロプラスチックを発見した時には、あまりの多さにびっくりしたといいます。

自作のパワーポイントでの約10分の発表でしたが、感想は、魚の内臓は食べないでおこうというものでした。同時に魚の大きさによってどう違うのか、プラスチックの種類などを調べることができなくて残念だったともありました。

そして、結論として男児がたどり着いたのは、自分にできることとしてプラスチックを使うことを減らしたり、他の物を使うようにすること、プラスチックは必ずごみ箱へ捨てるというものでした。ごく当たり前のことのようにですが、そこに至るプロセスには説得力がありました。

同時に発表した関西大学の草郷ゼミの学生の一人は、小5の彼の発表に「問題意識 → 仮説 → 分析 → 結果・考察と研究のサイクルができていて、小学生の凄さを感じました。」と感想を書いていました。

また、初登場の草郷ゼミ生の発表は、地球温暖化をテーマとした「他人事ではない吹田の生活ごみ問題」で、公開されている吹田市のデータや自作の画像をもとに、小学生にもわかりやすく整理されたものでした。こちらの発表も「他人ごとではない」のだと、会場の多くが共感したようです。

「社会の課題」というと、どうしても大上段に大きなことを取り上げてしまいがちですが、それでは空中戦になってしまい、結果どこに降り立つのか迷ってしまいます。迷うならまだいい方で、探究した結果をアウトプットすらできない。アウトプットしてもどこか浮ついて説得力がないことになってしまいます。